

第 131 回 『わかるように伝えていきますか』

香川大学教育学部 特別支援教育領域 教授

香川大学教育学部附属幼稚園 園長

香川大学学生支援センター バリアフリー支援室 室長

坂井 聡

どのような視点をもつことが重要か

令和の時代を迎えた日本の教育では、ICT の活用が当然となり、今後はますます推進されていくことが想像できます。そして、これはすべての児童・生徒に対して推進されていくものなのです。これらのことを踏まえた上で、「主体的、対話的で深い学び」の視点からの授業改善や、インクルーシブ教育システム構築と学びの保障についての方法を検討することが求められるのではないかと思います。

では、どのような視点で ICT の活用を考えれば、特別支援教育と結びつけることができるのかを考えてみたいと思います。

まず、大切なことは、障害を ICF (International Classification of Functioning, Disability and Health) の観点で考えることだと思います。この障害観では障害がある状態は、参加できない状態や活動できない状態であると考えます。その状態を改善するために、参加、活動できるようにしなければなりません。それを個人の努力で乗り越えて、参加できるように、活動できるようにと考えてもうまくいかないのです。車椅子ユーザーの前にある階段、これを降りるために車椅子ユーザーを訓練しても、ほとんどの人は降りれるようにはならないと言うことです。そのためにはスロープ等が必要でしょう。環境の側を工夫する必要性を求めているのです。つまり、参加できなかったり、活動できなかったりするのには、環境の側に問題があると考えられるということです。この視点をもつておくことができれば、特別支援教育における ICT 活用のアイデアを考えることができるのではないかと思います。ICT が活用できる環境を整えることで、それを利活用して、参加・活動できるようにしていくためにはどうすればよいかという発想ができるからです。この環境を考える上で重要なのは、アクセシビリティを考えることです。

アクセシビリティとは、障害のある人が、他の人と同じように物理的環境、輸送機関、情報通信及びその他の施設・サービスを利用できることをいう言葉のことです。そこで問題とされるのは有用性ではなく、そもそも、そのサービスや機能に到達できるか、サービスや機能によって提示される情報を取得できるかということです。

例を挙げて考えてみることにします。学校での授業で考えるならば、授業に参加し活動できるようにするためには、教科書にある情報に到達できなければならないでしょう。しかし、紙の教科書ではそこにある情報に到達できない子供がいた場合、どうやって教科書にある情報に到達できるのかを考えるということなのです。

これを考えたとき、デジタル教科書等の ICT の活用は必要な情報にアクセスできるようにする一つの方法として検討されて当然だろうと思います。

例えば、デジタル教科書に搭載されている文字色・背景色の変更の機能や漢字にふりがなを表示させる機能の活用は有効になるのではないのでしょうか。その他にもリフロー表示機能、音声読み上げ（機械音声）の機能があることで、教科書の内容にアクセスすることができるようになる子供もいるのではないかと思います。

このように考えると、授業に参加でき、活動できる児童が多くなると考えられるのです。

～坂井聡先生の紹介～

((プロフィール))

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了 香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部特別支援教育領域 教授。1997 年には自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。